



イギリス科ニューズレター

No. 21 / Sept. 2013

東京大学教養学部地域文化研究学科イギリス分科

〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 (8号館402号室)

Tel/Fax 03-5454-6304 (イギリス科研究室直通)

Email: british@markjask.c.u-toyo.ac.jp

Web Page: <http://british-section.c.u-tokyo.ac.jp>



主任の挨拶に代えて

—アビーガーデンズ街雑感—

西川 杉子

この夏は日本各地でたいへんな豪雨と猛暑が続きましたが、みなさまにはお元氣でお過ごしでしょうか。

イギリス科主任を務めて2年目となりますが、後期課程改革が進むなかでイギリス科の教員全員が一段と忙しくなっていることを実感しております。そんな中でも、10月19日のホームカミングデー午後にはコモンルームを開放して、イギリス科関係の方々をお待ちしておりますので、時間のおありの方はぜひお立ち寄りください。

* * *

忙しいと言いつつも、今年の7月初頭にも数日間、ロンドンに滞在する機会をいただきました。私がロンドンに行く度にお世話になるのは、歴史家D氏の紹介で親しくなったデニス・グドウィンさんの一家です。

グドウィンさんの家はロンドン北西部セント・ジョンズウッド地区のアビーガーデンズ街にあります。この地区については、ビートルズのあの横断歩道を渡っている写真が撮られた通り「アビーロード」を連想する人が多いのではないのでしょうか。アビーガーデンズ街は、まさにそのアビーロードのスタジオの北側を脇に入ったところにあります。セント・ジョンズウッド地区はヴィクトリ

ア朝に高級住宅地として開発されたところで、今でも、いかにもロンドンの「ミドルクラス」が好みそうな住宅地といった佇まいを保っています。フェビアン協会とも関係が深かったデニスさんの祖父がアビーガーデンズ街に家を購入したのは二十世紀初頭とか。私が初めてグドウィン邸におじゃました1990年代は、毎晩のように友人達や地区の労働党のメンバーが集まるディナーが開かれていました。

集まる人たちは、アビーガーデンズ街周辺の人が多いのですが、著名な政治家の親だったり、リヒャルト・シュトラウスのイギリスに紹介した芸術家だったり、私も日本で著作を読んでいた歴史家だったり...しかし、彼らの話に耳を傾けていると、ほとんどが祖父母や父母の代から知り合いであったり、あるいは昔、同じ地方の別荘で過ごした経験を分かち合っていること等々がわかりました。大半がオックスブリッジ出であることは言うまでもありません。購読紙は高級紙(グドウィン家は『ガーディアン』)の他にTLS、『スペクテータ』もしくは『エコノミスト』、BBCの時代物ドラマやNTの評判の舞台は欠かさず観ているし、毎朝BBC Radio 4を聞いている。彼らのあいだで過ごしていると、イギリスのミドルクラスというのは、なんと狭く、緊密なコミュニティなのだろうとしみじみと感じました。

しかし、1990年代末、私が留学を終えた頃から、アビーガーデンズ街のグドウィン邸に集まった人たちが次から次へとロンドンを去っていったように思います。それは、住民の高齢化と、そしてなによりロンドンの物件があまりにも高騰したために、若者たちが離れていったのが主な原因でしょうか。グドウィンさんたちも、近所の家々が次々と世界的な富裕層に買い取られ、所有者でも実際に住んでいる人は減ってしまったと、寂しそうに嘆くようになりました。2000年代になるとアビーガーデンズ街では、先代から続く所有者はほとんどいなくなり、灯のともる家も少なくなって、夜を通してガードマンが雇われるようになりました。グドウィン邸の真向かいがエステ・サロンに変わり、ハリウッドのスターがお忍びでくるようになったのもこの頃。近所のハイストリートにはポーランド人のパン屋兼カフェができ、街路で食事をする観光客をみかけるようになりました。昨年のダイヤモンド・ジュビリーの際は、アビーガーデンズ街は華やかに飾り立てられ、大規模なストリートパーティが開かれましたが、主催者は、そのパーティを開くために合衆国から「自宅」を訪ねてきたアメリカ人だったそうですから、町内のお祭りや単純に呼べるものではなかったようです。

この7月、わずかな時間をやりくりし

て、アビーガーデンズ街に滞在しましたが、この街にあのミドルクラスのイギリス人は住んでいるのだろうかと思議な気分になりました。デニス・グドウィンさんも家を売却してオックスフォードに引っ越すことになり、私がアビーガーデンズ街を訪ねるのもこの夏が最後となりそうです。一見、街の外観は変わらないのですが、住む人の変化の激しさを改めて感じた滞在となりました。



教務補佐からの退任のご挨拶

澤田望

昨年のちょうど同じ時期に着任のご挨拶を書かせていただいたばかりですが、9月30日をもちましてイギリス科の教務補佐を退任し、10月1日から英語部会の助教として英語教育関連業務に携わることになりました。在職中は、イギリス科の学部生・院生の皆さんにたくさん元気と刺激をいただき、イギリス科の先生方には教育・研究・大学の運營業務に関するアドバイスをいただいたお蔭で、新しい発見の多い時間を過ごすことができました。私がいくつかの大学で職を兼任していたため、学期中は仕事が重なりご迷惑をおかけすることもございましたが、暖かく見守っていただき感謝する限りです。特に昨年7月は、時間割作成の忙しい時期であったにもかかわらず、博士号の学位授与式のため渡英することを許していただき、両親を連れて一週間弱イギリスとパリを旅することができました。今年の5月にイギリスで開催されたアフリカ新聞研究に関する国際学会(The Cadbury Conference 2013, African Newspaper Cultures)における報告の際にも快く送り出していただ

き、バーミンガム大学で共に過ごした研究者と再会を喜び合うことができました。

非常勤講師として出講させていた大学でも、イギリス科で学んだ知識に助けられました。埼玉大学と早稲田大学で「イギリス文化特殊講義」と「変貌する英語圏世界」という授業を担当し、イギリス帝国の歴史を、サハラ以南アフリカや西インド諸島など大西洋を隔てた様々な繋がりから考察する講義を行ったのですが、恥ずかしながらこの時はじめて、留学中には身近すぎて客観的に考えることができずにいたイギリスの社会状況を再考することになりました。例えば、イギリスへの移民の歴史について言及する際に、どうしてもアフリカ研究所に所属していた経験から、アフリカ系移民史の再記憶化を目的とした Black History Month などの重要性を強調してしまいがちな自分に気がつき、博士論文に関連する事柄に偏っていた知識を再検討する必要性を強く感じました。

この4月から担当させていただいている駒場の「教養英語」の授業では、以前「英語I」を教えていらっしやっただいイギリス科大学院時代の先輩からの助言が役立ち、また英語部会の懇親会では、山内久明先生、木畑洋一先生、安西信一先生など元イギリス科の先生とお話しさせていただく機会があり、とても励みになっております。さらに草光俊雄先生が主任講師をなさっている放送大学大学院講座「アフリカ世界の歴史と文化」の添削等のお手伝いをさせていただいたことで、ヨーロッパとアフリカの関係史について視野を広げるきっかけになりました。

今年で私のイギリス科とのご縁も10年になります。指導教官として受け入れてくださった中尾まさみ先生をはじめとする寛大なイギリス科の先生方や経

験豊かな先輩に恵まれ、一旦は長期留学によって根無し草のような気分になっておりました私に、もう一度居場所を与えていただき、誠にありがとうございました。まだまだ研究者としても教育者としても駆け出しの状態ですが、今後も自分が置かれた環境の中で少しでも周りのお役にたてるよう努めてまいります。最後に、イギリス科の益々のご発展をお祈りし、退任のご挨拶と致します。



新教務補佐からのご挨拶

加太康孝

このたび教務補佐の任を拝しました、加太(かぶと)と申します。ご挨拶の場を頂き、気の利いたことの一つでも書こうと意気込んでみたものの、読者がイギリス科の偉大な卒業生の皆様であることに思い至り、ピタッと筆が止まってしまうました。背伸びせず、自己紹介から始めさせていただきます。

イギリス科には、学部時から学生としてお世話になっており、現在も博士課程に在籍して中尾まさみ先生のご指導を仰いでおります。20世紀前半、特に戦間期のアイルランド・イギリス文化研究が専門なのですが、この文化研究というのが曲者で、一向にまとまる気配がありません。

思い返せば進学時の私は、課外活動に現を抜かし、何とか単位を揃えて迎え入れていただいた、ダメ学生の典型でした(ご安心ください、今の学部生は勉強熱心です)。そんな私にとってイギリス科は、学府たる大学というものを初めて体感する場でした。教養も語学力も、もちろん専門性もないまま後期課程に突入

した私は、すぐに自分の無力を思い知らされることになりましたが、同時に、知的好奇心を刺激され、知見が広がっていく心地良さは代え難いものでした。授業を受け終えてコモンルームに戻れば、今度は機知に富んだ先輩の会話、そして友人の雑談が学問的議論に発展していくさまに圧倒され・・・と、当時の私には、「すごい!」「かっこいい!」としか言語化できないような体験の毎日だったのです。その後、拙いながらも論文を書いたり学会発表をしたりする過程で、「研究」をすることの大変さ(のおそらく氷山の一角)も感じられましたし、他方ではイギリス科の歴史、その「すごさ」を、だんだんと具体的に知っていくことにもなりました。「かっこいい」ものは、やはり眺めているのと目指すのではだいぶ勝手が違うようです。研究者というものに対して、そしてイギリス科の伝統に対して、大きくなるばかりの畏怖の念を、時には持て余し気味に過ごしながら、今回どういうわけかそのスタッフの末席を汚すに至り、気が引き締まるとともに、なんだか不思議な気もしています。

10月に着任ということですので、今は課せられるべき任務についておぼろげな不安を抱え(つつ学会発表の準備をし)ながら新たな月を待つばかりですが、これまで私がお世話になった諸先輩方のお仕事ぶりに恥じることはないよう、アカデミックでアットホームな場を、末席から私なりに支えていければと存じます。どうぞよろしく願いいたします。



ニュージーランド留学記

4年 塚本皓

私は2012年の2月から6月までオタゴ大学付属語学学校に、7月から11月までオタゴ大学にてスタディアブロー

ドコースを受講し、現地の学生と同様の授業をとりました。

もともと興味があった名誉革命以後のジャコバイトに関する授業では、講義を聞くことだけでなく一次資料を皆で読んでディスカッションする時間が大変有意義でした。試験やレポートも当然ながらすべて英語で行うため、英語力の乏しい私には大変でしたが、それでも頑張って書いた拙い文章に対して、論理的に矛盾してしまっているところや真実と歴史家の見解との境目があいまいになってしまっているところなどを丁寧に指摘して下さいました。歴史の授業のほかにもビジネスの授業やマーケティングの授業を受講し、今まで日本においてすら学んだことがない事柄を日本語ではなく英語で学ぶという二重の新鮮さが体験でき、大変ではありましたが非常に魅力的でした。

生活面においては、7月から11月まで住んだ寮での生活がとても印象に残っております。入った当時はきちんとコミュニケーションがとれるか不安でしたが、私が予想していたよりも日本語の授業をとるニュージーランドの学生はたいへん多く、彼らは私に積極的に話しかけてくれました。日本語に興味のない生徒であっても基本的にフレンドリーな人が多く、特にサッカーやバレーボールの寮対抗戦などのイベントを通じて仲良くなるのが出来ました。

そうした仲間たちと朝から晩まで常に英語でコミュニケーションをとることは、英語力を向上させたかった私にとってとてもよい環境でしたが、それに加えて多様な価値観を学べたことも大きかったです。自分が日本や東京という枠組みの中で当たり前だと思っていたことが実はそうではなかったという体験が、日々の生活の中でたくさんありました。そして、日本に比べて様々な国から

来た人々が集まっているニュージーランドには、そうした多様性を受け入れる風土というのが備わっていると感じ、それがニュージーランドの良さであると感じました。

ニュージーランド留学で得られたものは、私のこれからの人生にとっても非常に大切なものだと思います。帰国して半年以上がたちましたが、ニュージーランドは将来ぜひもう一度訪れてみたい国のひとつです。また、そうしたニュージーランド人がビジネスのために多数移住していくといわれるオーストラリアにもまた訪れてみたいと考えております。ただし、まだまだ自分は英語力が足りないので、どこに行っても円滑にコミュニケーションがとれるよう、日々精進したいと思います。



卒業生による近況報告

野上謙人(2012年卒)

駒場東大前の駅を降りずに通り過ぎ、東京の東側にある職場に向かう生活が始まって、はやくも半年になります。京王井の頭線の車窓からは8号館が見えないせいか、郷愁にとらわれることもしばしばです。

僕はイギリス科の放蕩息子として5年間もコモンルームを占拠したのち、現在は大手監査法人で会計士の卵として働いています。住み良い我が家を離れてどんなにつらい思いをするのかと思いきや、あっけなく新しい環境にも慣れ、日々がんばっています。

折にふれて思うのは、イギリス科での得難い経験は、大きな財産として僕のなかにとっしりと横たわっている、ということです。会計士というと、黙々とPCに向かって数字を眺めているイメージがあるかもしれませんが、実際にはたく

さんの方々と話し、たくさんの方々の文章を書く仕事です。会計士はあくまで財務諸表(会社が自己開示する成績表のことで)に書かれた数字についてのみ意見を表明しますが、数字の背後には会社をとりまく様々な人々の努力や苦労があります。その生まれや育ちを含めて数字を深く理解し、理解した内容を正確に記述・検討しなければ、誤った判断をしてしまう可能性が高まります。そのため、我々は会社の方々と頻りに議論をおこない、文献等の資料を参照し、検証の結果を明瞭な文章にまとめます。

こうした僕の日々の活動は、イギリス科で論文を執筆していたときのそれと全然変わりがありません。議論する、調べる、書くといった作業に向かう僕のスタンスは、間違いなくイギリス科での生活を通じて養われたものです。様々な興味関心を持つ仲間と尊敬する先生方とに囲まれて、楽しく過ごしたあの日々が、いまの自分のベースにあるのだと感じています。

決して優等生ではなかった僕をイギリス科に置いて下さった先生方、先輩後輩の皆様には、感謝の言葉もありません。毎日を一生懸命楽しく過ごし、イギリス科の名に恥じない活躍を見せることで、間接的にはありますが恩返しが出来たらなと思っています。アルヴィ先生を始めイギリス科の皆さん、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。



2013年度、イギリス・コースは3年生7名、4年生8名(うち1名留学中)計15名、大学院生は7名です(9月現在)。今年度は冬学期に卒業生の伊藤航多先生が非常勤講師として授業を担当して下さいます。



イギリス科よりご案内 2013年度ホームカミングデイ のお知らせ

来たる10月19日(土)に本郷、駒場両キャンパスで、第12回ホームカミングデイが行われます。公式行事については

<http://www.alumni.u-tokyo.ac.jp/hcd/>

にご案内が掲載されています。

イギリス科研究室(駒場キャンパス8号館4階402)も、皆様を心よりお迎えいたします。午後3時半~5時半頃にかけて、主任や学生がお茶や軽食などを用意してお待ちしております。お誘い合わせのうえ、お気軽に足をお運びください。詳細は、追ってイギリス・コースホームページ

<http://british-section.c.u-tokyo.ac.jp/>

でお知らせいたします。



卒業生の方にお礼とお願ひ

昨年のニューズレターで同窓生の皆様にご支援をお願いしました後、多くの方から御芳志を賜りました。お名前を全て記すスペースがありませんが、特に、お礼状を出すことができなかった「イギリス科8回卒業生」の皆様には、この場を借りて、深く御礼申し上げます。

* * * * *

「イギリス科ニューズレター」は、現在、紙媒体と電子媒体の2種類のやり方で、皆様のお手元にお届けしております。今回、紙媒体でお送りした方で電子化にご協力いただける方は、メールアドレスを卒業生連絡専用アドレス

[igirisuka\[at mark\]ask.c.u-tokyo.ac.jp](mailto:igirisuka[at mark]ask.c.u-tokyo.ac.jp)

(at mark は@, 研究室アドレスとは異なります)

のでご注意ください)までお知らせ下さい。

また、お届けいただいているご連絡先(住所、電話番号、メールアドレス)に変更などがある場合も、お手数ですが、上記アドレスまでご連絡をお願いいたします。

ニューズレターに関しましては、経費節減と環境・資源への配慮から電子化を進めておりますが、同窓会のご案内など郵送が必要なものもございます。郵送費の資金繰りは毎年厳しくなっております。同窓生のみなさまに引き続きご支援をご検討いただけますと幸いです。ご賛助いただけます場合は、以下の口座にお振込みいただけますようお願い申し上げます。

同窓会用の口座は、

ゆうちょ銀行: 口座名:イギリス科

口座番号: 10090-2-43621671

ゆうちょ銀行の口座をお持ちの方は手数料に関してはATM無料、窓口140円

ゆうちょ銀行以外からの電信振込の場合は、手数料525円

ネット振込の場合は、口座番号が変わります。

■銀行名 ゆうちょ銀行

■金融機関コード 9900

■店番 008

■預金種目 普通

■店名 〇〇八店(ゼロゼロハチ店)

■口座番号 4362167

どの銀行にお口座をお持ちかによりませんが、手数料は無料あるいはゆうちょ銀行以外からの電信振込、郵便局の窓口振込よりもずっと安くなります。

2013年度

イギリス科運営委員

西川杉子(主任)、後藤春美(副主任)、小川浩之、中尾まさみ、アルヴィ宮本なほ子、澤田望(教務補佐)加太康孝(10月着任予定)